

## 戦後肢体不自由児教育の発展過程と都立光明養護学校

—映画「愛と力」(1967年)の分析を中心に—

中 村 尚 子 立正大学社会福祉学部  
玉 村 公二彦 奈良教育大学学校教育講座（特別支援教育）  
越 野 和 之 奈良教育大学学校教育講座（特別支援教育）

## The Tokyo Komei Special School in Context of Postwar Development of Education for Children with Physical Disabilities: An analysis on the film “Love and Power (Ai to Chikara)”

NAKAMURA Takako

*(Department of Social Welfare, Rissyo University)*

TAMAMURA Kunihiko

*(Department of Special Needs Education, Nara University of Education)*

KOSHINO Kazuyuki

*(Department of Special Needs Education, Nara University of Education)*

### Abstract

In this paper, we examined the film “love and power”, which included the image documents of the Tokyo Metropolitan Komei Special School in 1967, in relation to the postwar development of education for children with physical disabilities. We showed the details of the visual image and the narration and analyzed the contents from the film.

The Komei Special School has played a role as a pioneer in education for children with physical disabilities since 1932. In the 1960s, the school education for the students with physical disabilities had required quantitative expansion and educational contents of special schools. The documentary film “love and power” was produced by Shou Watanabe in such era.

The image and narration of the film could be roughly divided into two. One was the documents focusing on the Komei Special School. The contents showed the way of features and educational practice, which should be provided in special schools as the achievements of the education for students with physical disabilities at the time. Another is the actual condition of children who were excluded from school education and their families. It showed the challenge of education for children with severely disabilities, especially agenda of human and education rights of those children faced in the late 1960s.

キーワード：肢体不自由児教育，光明養護学校，映像

Key Words：Education for Children with Physical  
Disabilities, Komei Special School, Film

## 1. はじめに

わが国の障害児教育は、戦前からの実践を引き継ぎつつも、日本国憲法と教育基本法（1947年）のもと、関係者の努力によって徐々に形づくられ、現在に至っている。戦後初期の盲学校、ろう学校の義務教育実施、養護学校の義務制が施行されないもとでのさまざまな教育実践の蓄積と1950年代に入ってから公立養護学校整備特別措置法制定や特殊教育行政の確立と整備計画の制定、1960年代後半から1970年代にかけての不就学をなくす取り組みと養護学校義務制実施（1979年）と、障害のある子どもと保護者の教育へのねがいを一つひとつ実現してきた歩みである。戦後70年を迎えた現在、初期の関係者の多くは故人となり、60年代以降の時代を築いてきた人びとからの聴取や史料・資料の保存が課題となっている。そうした史料・資料の一角をなすのが映像である。

筆者らの一人である玉村は、「障害児者の教育や福祉の分野で、実践を反映した劇映画からドキュメンタリーも含んだ映像・映画が作られていくのが1960年代であろう<sup>1)</sup>」と述べ、近江学園の重度知的障害児への取り組みを描いた『一次元の子どもたち』（東京12チャンネル、1965年）、重症心身障害児施設びわこ学園での実践と研究にもとづく療育記録映画『夜明け前の子どもたち』（1968年）に代表される映像を保存し、史料として分析する研究の重要性を指摘している。玉村は、こうした課題意識をもち、すでに京都府、滋賀県など関西圏域を中心としたいくつかの映像の分析を行っている<sup>2)</sup>。本稿は、玉村らが組織した戦後障害児教育福祉実践記録史研究会の研究の一環に位置づくものであるが、主として関東以北の映像の保存と分析を行う作業の一つとして着手するものである。

1960年代後半から70年代初頭、関東以北エリアにおいて制作された障害児教育・福祉をテーマとした映像としては、肢体不自由児施設多摩緑成会整育園の日常と施設内教育を描いた『克服—手足の不自由な子供たちの記録』（1957年）、知的障害児施設を舞台として障害児を産んだ母親の葛藤を描いた『われら人間家族』（近代映画協会、1966年）、東京都立光明養護学校の実際と在宅児の現実を対比的に描いた『愛と力』（1967年）、国立療養所西多賀病院（宮城県）筋ジストロフィー病棟を記録した『ぼくの中の夜と朝』（1970年）、東京都立小平養護学校に開設された脳性まひ児学級を追いつつ施設や在宅の障害児の実態をとらえた『ともだち』（1971年）などがある<sup>3)</sup>。

本稿では、『愛と力』をとりあげ、1960年代の肢体不自由教育の到達点や光明養護学校の史料・資料との関わりでその内容を検討する<sup>4)</sup>。なお、本稿では、映画の内容を示すために最小限で映像からとった画像を制作者からの許可のもとに使用している。また、映画のナレーショ

ンについても、今日では使用しない用語も歴史的資料としてそのまま使用していることをあらかじめ記しておく。

## 2. 1950年代の肢体不自由児教育

### 2.1. 教育としての出発と学校教育

わが国における組織的な肢体不自由児教育は、柏倉松蔵による私塾「柏学園」（1910年、東京）を嚆矢とするが、公教育の開始としては東京市立光明学校（1932年）がその先鞭をつけた。両者とも、多くの困難を乗り越え、戦後に継承されていく。戦後、肢体不自由児の教育は学校教育法、児童福祉法の下で、さまざまな試みが各地ではじまった。

東京都立光明養護学校（現、東京都立光明特別支援学校）は、わが国初の公立の肢体不自由児学校である。東京市立とはいえ「各種学校」として出発し、国民学校令（1941年）によって1942年には光明国民学校となり、終戦を迎えた。戦後は、敗戦直後の財政難等を理由として、学校教育法に規定された養護学校が義務教育とされなかったため、学校を運営し、教育を行うにあたって、東京都立の小学校、中学校として再出発する。空襲によって被災し、校舎や寄宿舎をなくしていた同校は、当時、疎開先の長野県上山田温泉での集団生活を継続していたが<sup>5)</sup>、新寮舎の完成とともに、1949年6月、東京・世田谷で本格的な教育を再開する。

「六月一日 開寮式挙行。授業開始。新生活が始まる。一名の欠席もない。黄色いモルタル塗装の新寮舎が、蒼空にくっきりした稜線を描く。しかし荒れ果てた校庭は、夏草茂って原野に等しく、校舎は焼夷弾の痕も生々しく、何処も彼処も修理を要する個所ばかり。復興三ヶ年計画を樹てる。<sup>6)</sup>」

学校は教室から校庭に直接出られるように設計され、校庭は「治療体操遊園」と称して、滑り台、鉄棒、ジャングルジムなどの遊具の他、手すりのついた歩行路などが整備されていく。

当時の児童生徒数は各学年15名で、創立20周年にあたる1952年の在籍は、小学部87名、中学部46名、計133名であった。

入学資格には「都内の学齢児童中運動機能に障害のあるもの、又は肢体に異常のあるもので、教養の可能性があると認められたものを選考の上、入学を許可する<sup>7)</sup>」とある。選考では身体検査と知能検査が実施された。欠員があれば中途入学も可能であった。

このころ、1年遅れで通常学級に入学し乳母車で通学したのち、光明へ中途入学した武市博子（脳性まひ）の母、武市正子は、見学に行った日のこと、そして入学できた喜びをつぎのように述べている。

「親でさえもてあましているこういう子供達を、こんなにも丁寧に、しかも明るい表情で面倒をみてくださるのに、私は心をうたれた。『五月に補欠選考があるから—』ということになった。それすらも待てずに毎日乳母車で学校に遊びに行った。(中略)5月中旬幸運にも入学が許可された。たくさんの同じ夢をもった親御さんとも話し合える。どうやら子供より私の方がはり切っていたし、楽しんでもいたような弾んだ毎日だった。<sup>8)</sup>」

光明が東京に復帰して後の戦後初期の約5年間、次節でふれるように、東京では、小平市にあった緑成会多摩整育園に、1951年度から光明小・中学校の分校ができたが(のちに東京都立小平養護学校となる)、独立した肢体不自由学校はここだけであった。

## 2.2. 肢体不自由児施設における教育活動

他方、高木憲治を中心とする戦前からの肢体不自由児療育関係者の努力によって児童福祉法中に肢体不自由児施設が法定化され、治療や訓練のために学齢児が入所することとなった。多摩緑成会整育園、群馬整肢療護園(ともに1950年開設)、整肢療護園(東京、1951年)、大阪整肢学院、福島整肢療護園(ともに1952年)など、1955年までに全国に17施設が開設され、入所児の教育問題が課題となっていった。肢体不自由児施設は「将来生業をいとなむことの可能性のある肢体不自由児」を入所対象とすることが一般的であったため、当然のことながら教育保障に迫られていたのである。

それぞれの施設において、施設職員が日中に勉強を教えるといったかたちで実践を開始する。整育園では、母体となった身体障害者補導所の病院に入院していた子どもたちを一室に集め、「補導所から先生の都合つく時間に来て頂き、一日2時間くらい複式授業によって学童教室が始められ、子どもの数が増えてくるにつれて「学校としての型が少しずつ作られ」、1950年、東京都から光明小・中学校の分校として認可を受け、1959年度から都立小平養護学校として独立した<sup>9)</sup>。整肢療護園は施設の指導員が東京教育大学附属小学校の講師として委嘱され教育を行ったが、正式に学校教育が始まるのは同校の特殊学級となった1954年度のことであった<sup>10)</sup>。

施設ごとに経過は異なるが、施設内教育から始まった取り組みにもとづいて全国施設長会議において入所児童生徒の義務教育について議論され、文部省に対する要望となり、「施設内に近隣の小・中学校の特殊学級が設けられるようになった」という。全国肢体不自由養護学校長会の手による『肢体不自由教育の発展』の記述によれば、1950年から公立養護学校整備特別措置法が施行される1956年までの間に、こうしたかたちで学校教育を開始した肢体不自由児施設は19施設である<sup>11)</sup>。次節でふれる公立養護学校整備特別措置法施行以降、これらの特殊学

級実践を基礎に、養護学校として開校していったところも多い。

## 2.3. 公立養護学校整備特別措置法

前述のように、養護学校を義務教育とする法整備がなされなかったため、都道府県が学校設置義務を果たそうにも財政措置がないままであったため養護学校が新設されることはなかった。したがって、光明小・中学校以外にも、小・中学校の形態で実際には障害のある子どもの学校教育を実施していた自治体や国の補助なしで養護学校を開校した自治体も存在する<sup>12)</sup>。前節で述べたように、戦後10年間の時期に肢体不自由児施設での学校教育実践も行われていた。

学校や施設関係者、保護者たちは、なんとか早期の義務教育実施をと各地で運動を重ねていた。また日本教職員組合特殊学校部は文部省(当時)とも連携を取り、それらの運動を先導し、全国組織としてできた養護学校・特殊学級整備促進協議会が法律を求めて国会に働きかけていく<sup>13)</sup>。この運動によって、1955年、第24通常国会において議員立法で成立したのが、公立養護学校整備特別措置法である。この時期、養護学校の義務制実施までは至らなかったが、同法によって養護学校を建設するにあたっての経費、教職員給与、教材費等について、他の公立義務教育諸学校と同等の国庫補助が充てられることとなった。

同法が施行された翌1956年度から各地に「養護学校」が開校し、徐々に増加していった。肢体不自由養護学校は、上述した自治体独自に開設した大阪府立養護学校(現、堺特別支援学校)、愛知県立養護学校(現、名古屋特別支援学校)に加えて、次のような学校が養護学校として開校、もしくは再出発した。

1957年度 東京都立光明養護学校、神戸市立友生養護学校

1958年度 東京教育大学教育学部附属養護学校、静岡県立養護学校、尼崎市立尼崎養護学校、神奈川県立うかり養護学校、京都市立呉竹養護学校

特別措置法が講じられたとはいえ、財政的制約があり、養護学校設置はスムーズには進行しない。文部省は1960年度を初年度とする養護学校設置促進5ヵ年計画を発表、1962年度には同計画の修正を行うが、設置義務、就学義務ともに法的拘束力がないという法的問題もはらんで、遅れは解消されなかった。そうしたなかであって、肢体不自由児施設の展開や関係団体の運動もあって、肢体不自由養護学校は1969年度に、全都道府県設置が実現した<sup>14)</sup>。



### 3. 1960年代の肢体不自由児教育と『愛と力』

#### 3.1. 『愛と力』の時代背景

これまで述べたような経過を経て肢体不自由養護学校は、光明1校の時代を終え、1960年代には量的拡充が求められ、同時に教育内容も模索されはじめる。本稿で検討するドキュメンタリー映画『愛と力』はそうした時代に制作された。

撮影がなされた1966年当時、全国的には肢体不自由養護学校の設置状況は以下のとおりであった。

国立 1校

都道府県立 41校

市立 11校

未設置県 宮城県、栃木県、埼玉県、福井県、京都府、滋賀県、和歌山県、島根県、山口県、佐賀県、宮崎県（ただし、京都府には京都市立呉竹養護学校が、島根県には松江市立清心養護学校があった）

市立養護学校も含めて複数の養護学校が設置されていたのは、北海道、群馬県、千葉県、東京都、愛知県、大阪府、兵庫県、福岡県で、本校のほかに分校を設置している県が14県15校あった。これらに就学していた児童生徒数は、小学部5,966名、中学部2,607名、高等部542名（17校）であった。

光明養護学校のある東京都における肢体不自由養護学校に焦点をあてると、表1のような状況であった。

表1 1966年度東京都立養護学校(肢体不自由)児童生徒数

校 名	児童生徒数		
	小学部	中学部	高等部
光明養護学校	176	93	76
江戸川養護学校	162	74	52
小平養護学校	91	53	—
北養護学校	108	49	37

当時の東京都の肢体不自由養護学校設置の計画と実施はつぎのようにすすんだという。

「この頃（昭和34年）、東京都は在宅肢体不自由児実態調査を行ったが、これに基づいて『東京都立特殊教育学校設置計画』を策定し、光明、小平の他に、地域配置を考慮して、江戸川、北、城南の地域に学校を設置する計画をたてた。／この計画にもとづき墨東地区の肢体不自由児をもつ父母の切実な要望も受け入れ、教委は、昭和36年1月、『都立江戸川養護学校』を設置した。小学部10学級、中学部3学級で発足したが、校地は地盤軟弱なため工事が遅れ、1学期間は、葛飾区下千葉町の旧都立農産高校の空き校舎を使用しなければならなかった。／また、37年7月北区の元極東米空軍地図局跡地に、『都立北療育園』が開設され、同年9月同園内に『光明養

護学校特別学級』を1学級設置した。翌38年2月に正式に『北養護学校』となり、4月から授業を開始した<sup>15)</sup>。」

教育の対象や教育内容の点では、文部省による次のような動向が注目される。

- ・1958（昭和33）年 文部省『肢体不自由児教育の手びき（上）』発刊
- ・1963（昭和38）年 『養護学校小学部学習指導要領肢体不自由教育編』（文部事務次官通達）
- ・1964（昭和39）年 同上中学部編
- ・1966（昭和41）年 『肢体不自由児教育の手びき（下）』発刊
- ・1967（昭和42）年 『学習指導要領肢体不自由編解説』発刊、文部省『機能訓練の手びき—肢体不自由教育のために—』発刊

#### 3.2. 『愛と力』制作の契機

『愛と力』は16ミリフィルム、モノクロ36分の作品である。1966年に撮影され、1967年に完成した。後掲のように、主な舞台は東京都立光明養護学校と茨城県日立市の重症心身障害児（者）を守る会の活動である。前者では学校で生きいきと活動し学ぶ子どもたちを、後者では行き場のないまま寝たきりや動き回る状態の不就学児の実態を描く。その映像は、見る者に障害のある子どもにとっての学校教育の重要性と、そこから遠ざけられた子どもと家族の理不尽さを訴えている。

『愛と力』は光明養護学校の企画に始まるものではなく、当時の在校生の保護者が制作者となる渡辺生（わたなべしょう）<sup>16)</sup>に撮影を依頼したことが契機となって撮影されたものである。

渡辺は当時、縁あって茨城県日立市に居住し、映画の仕事のために東京での生活も送っていた。あるとき、知り合いから身体の不自由なわが子の運動会の撮影を依頼される。その子どもが通学していたのが光明養護学校であった。渡辺は記録映画にしようと思った動機を次のように述べている<sup>17)</sup>。

「自分で、困った（人の）ことをなんか映像にしてみたいと思っていたときに、ちょうどその（撮影依頼をした保護者の会社の）番頭さんと知り合って、撮り始めました。それからずっと、校長とかにお願いして、だんだんと奥へと入って行って、おしくなって撮影させてもらいました。」

地元日立では、「太陽の家」という施設づくりの新聞報道を読んで訪ねた重症心身障害児（者）を守る会日立支部の渡辺氏と知り合い、同会が行った実態調査に密着、さらには1967年の第3回重症心身障害児（者）を守る会の全国大会も取材し、意見を述べる母親（日立市の代表）の声を収録している。

最初は私的関係で光明養護学校にカメラを持ち込んだ

のであるが、その熱意と内容を理解したからであろう、光明養護学校は協力を惜しまなかったことが映像から伝わってくる。仕上がった映画に対して、光明養護学校は当時の賀屋典宣後援会長と小野勲校長名で、渡辺にあてて感謝状を贈った。感謝状は次のような内容である。

「多くの障害とたたかいそれを克服しようとひたむきな努力を続けている本校の児童生徒を中心に心身障害児の実態を強く世に訴える記録映画『愛と力』を完成し本日御寄贈下さいまして有難うございます。この映画により本校児童生徒の向上心が一層培われ世の人々にも深い理解と協力が得られることを信じます。(以下略)<sup>18)</sup>」

『愛と力』は、光明養護学校運動会の撮影という当初の目的を大きく越えて、1960年代の障害児問題の実態に迫る映像となっていたのである。

#### 4. 『愛と力』の内容とその意義

『愛と力』のシーンとナレーションの詳細を資料1に示した。『愛と力』の映像が映し出し、ナレーションが語った世界は2つに大別できる。一つは光明養護学校を中心とした映像である。ここからは、当時の肢体不自由教育の到達点として養護学校の備えるべき機能や教育のあり方が抽出できる。もう一つは、不就学児とその家族の映像である。ここからは1960年代後半において直面していた障害児、とりわけ障害の重い子どもの教育権保障の課題が見えてくる。以下、具体的にみていこう。

##### 4. 1. 光明養護学校映像の特徴

###### 4. 1. 1. 通学手段としてのスクールバス

『愛と力』はプロローグの入学式シーンと「愛と力」のタイトルを書写する少女【写真1】のあと、タイトルが示される。



写真1 タイトル「愛と力」を書写する少女

その後、最初にとらえられたのは通学のような様子である。スクールバスに乗る子どもたち、バスの中のような様子をと

らえる。肢体不自由児学校にとって通学手段の確保は重要課題との認識は戦前の開校当初からあり<sup>19)</sup>、寄宿舎の設置とともに重視されていた。

戦後、1959年4月に念願のスクールバス3台が配置された。1961年度の資料によれば、小学部～高等部まで全校児童生徒264名中、スクールバス利用者は138名と半数に上っている<sup>20)</sup>。映像は、バスを待つ親子や車内での子どものような様子映し、「このバスは、東京都が手足の不自由な子どもたちのためにつくったもので、その名も『ひかり号』」というナレーションが入る。

###### 4. 1. 2. 機能訓練や言語訓練

「機能訓練室」という表示の教室では、子ども一人ひとりに対して機能訓練が実施されている。床に横になっての訓練を受けたり、平行棒での歩行練習をしたりしている子どものようすをカメラはとらえる【写真2】。施行している白衣の女性は「機能訓練師」という東京都が独自に配置した職員である<sup>21)</sup>。当時、肢体不自由養護学校の学習指導要領がすでに作成され、「養護・訓練」の前身である「体育・機能訓練」が設定されていたが、それを担う職員の配置はまったく考慮されていなかった。光明養護学校では戦前から看護婦がマッサージ等を施行していたが、戦後、早期から専門的な職員の必要性が認識され、1958年から学校の裁量でマッサージ資格をもつ職員を雇用していた。1963年度には東京都として機能訓練の専門職である「機能訓練師制度」を創設し、肢体不自由養護学校に配置していたことは特筆されるべきであろう。

「言語治療室」の場面は、専門家の協力を得て取り組まれていた聴覚や言語の検査のようすがわかる。当時、「言語治療室」には、田口恒夫医師が関わっており、オーディオメータを用いた聴力検査等も定期的におこなわれていた。言語障害については特に脳性まひとのかかわりで校内の研究が熱心に取り組まれている<sup>22)</sup>。

###### 4. 1. 3. 教育内容

日常の教室での学習は、社会、音楽、図工が撮影されている。「教室では、普通の学校と同じように、今、社



写真2 機能訓練



写真3 光明養護学校の「音楽」

会科の勉強が続いています」とノートに字を書く子どもたちに焦点があてられ、通常学校の音楽の授業場面にたいして「この子どもたちは、音楽に合わせて、自由にリズムを取ることができます」とのナレーションのあと、光明での音楽となり【写真3】、「しかし、手足の不自由な子どもたちはそれが難しいので、学校ではさまざまな楽器を使って情操を身につけさせるよう努力しています」と解説していた。さらに図工の場面では、絵筆を持ち、懸命に描く子どもが撮られ、「不自由な手でする図工もたいへんです」といったナレーションが入る。全体として、あせらずゆっくりとした授業風景である。障害に配慮しつつ通常の教育と同じ内容を保障しようと取り組みが進められていた。

その他、マット運動（体育）や横浜への遠足、運動会などのようすが描かれている。運動会は、たとえ通常学校に就学できたとしても、楽しんだり力を出したりすることができにくい時間であったはずである。精一杯力を出して走る子どもたちのようすは、同じ障害をもつ子どもが学ぶことで得られる明るさとなって伝わってくる。

#### 4.1.4. 進路指導

「職業科教室」のようすが撮影されている。特にタイプとガリ版である。光明養護学校は、1958年度、全国に先駆けて高等部を設置し、職業教育に力を入れていた。園芸科、編物科に始まり、1961年度からタイプ科（和文、英文）、謄写版科が追加された。タイプ科は一般のテキストを使用した本格的なものであった。また謄写版科は校内の生徒会新聞の製作も担当したという<sup>23)</sup>。

#### 4.1.5. 母親の待機

「子どもの授業が終わるまで、お母さんたちは控え室で待っています。話題は、やはり子どものことが多い」というナレーションがあり、保護者控え室のようすが撮影されている。このころ、光明養護学校では親の付き添いが一般的であった。前述した武市正子のように、付き添いを入学の条件にされた親子も少なくなかった。校内

の移動やトイレ介助、授業中の道具の出し入れや補助などを保護者が行っていたのである。親たちは映像のように控え室で過ごすこともあったが、教室の後ろに控えることもあった。

1966年から67年にかけて、光明養護学校ではこうした親の付き添いについて大きな運動が起こっていた。付き添いができない日は学校を休ませざるを得ない、弟妹の世話ができないなど、控え室や保護者会で母親たちが意見を出し始めたのである。付き添いができないときに学生を頼む親もあり、それを見た親たちは、介助の制度をつくってもらおうと動き出す。1966年には、学校として付き添いを置いてほしいという声としてまとまっていた。教員の側も、親が教室にいることでの教育指導上の問題と子どもの教育権保障という観点から、東京都にたいして一緒に要望することになった。この要望は都議会への陳情、請願へと運動が広がり、他の肢体不自由養護学校と一緒にになって取り組まれた。都議会で採択され、予算化の運びとなり、1967年4月から肢体不自由養護学校4校に28人の介助員が配置されるという画期的な成果を得た<sup>24)</sup>。『愛と力』は介助員問題にはまったくふれていないが、背景としてふまえておきたい事実である。

#### 4.2. 不就学児の実態

さて、もう一方の不就学問題については、まことに深刻な現実が横たわっていた。映像はまず、同じ東京都板橋区の少年をとらえる。「ある養護学校に入学試験を受けに行ったのですが、施設が少ないことと、教職員の数が足りないため、入学を断られてしまいました」とナレーションが入る。当時、東京都には4校の肢体不自由養護学校があったが、「入りたくても入れない子ども」がたくさんいたのである。そしてカメラは日立市へと移る。

ここからは、「光が届かない社会の奥底」（ナレーション）の現実が切り取られる。日立市の在宅障害児の訪問調査の様子が示され【写真4】、寝たきりで31歳となった男性、耳が聞こえず足が不自由な小学生、身体の変形がある16歳の男児【写真5】、そして、行動障害のきびしい女児などの姿を映し出していく。長期の在宅生活がもたらす障害の重度化、家族が背負うしかない負担の重さを、光明養護学校をとらえた同じカメラが直視する。

しかし、作者の渡辺は絶望と隣り合わせの現実を受けとめながら変えていこうとする人々にも光を当てている。現実をつぶさにとらえ、家族の声に耳を傾ける実態調査、重症心身障害児（者）を守る会の大会で「重症児を抱えた親の気持ちがいちばんつらい季節は桜の咲く4月だ」と教育が保障されないことの理不尽さを訴える母親、そして学校ではないけれど通える場をと通園施設を要望し実現した親たちの活動である。

1960年代後半、映像ばかりでなくジャーナリズムも不





写真4 日立市の在宅障害児訪問調査



写真5 長期の在宅生活で身体が変形した男児（16歳）

就学児や重症児問題に目を向け<sup>25)</sup>、地域では実態調査によって権利侵害の事実が明らかにされ、さらに理論研究も行われてきていた<sup>26)</sup>。親や学校教育関係者が障害児の教育権保障実現に向けて動き出しはじめていた時代である<sup>23)</sup>。『愛と力』はこの時代の「現実」を、映像で伝えるものとなっている。

## 5. おわりに

「…養護学校は（昭和33年7月現在）、精神薄弱児を対象とするもの11校、肢体不自由児を対象とするもの7校、病弱児を対象とするもの8校で、これらの計は26校であって、設置義務のない今日、当然とはいえまことに寂しい数である。…／これを前述の特殊教育の対象とすべき児童生徒の総数120万人に比べると、適正な特殊教育を受けているものは、全体のうちで4%にも満たない低率だということになるのである。この4%という適正就学率も、さらにこれをいっそう詳しく分析してみると対象の種別によって非常な相違がある。／まず就学が義務づけられている盲およびろうについては、前者が41.73%で、後者が68.56%であるが、これらに対して精神薄弱は1.37%、肢体不自由は2.21%、また病弱・虚弱は3.6%で、わずかにゼロではないというにすぎない。

い。／…一般義務教育の就学率が、小学校・中学校とも99.7%であるというわが国の就学率の水準に比べると、これはあまりにも著しい低率である。／盲・ろう以外の特殊教育の対象の適正就学率の低率は論外である。」

1958年、公立養護学校整備特別措置法が動き出した直後の実態を、文部省は『肢体不自由教育の手びき（上）』においてこのように述べていた<sup>27)</sup>。9年後の1967年、同書が改訂されたさいには、1966年の数字を示し肢体不自由児の就学率は上昇したものの「21.1%にすぎない」とした上で、3種類の養護学校のうち肢体不自由養護学校については、まず最初に都道府県に設置義務を課す方針だと述べている<sup>28)</sup>。しかし、現実には、養護学校義務制実現までに10年以上の年月が費やされることとなる。

『愛と力』は「21.1%」の内と外の現実をみごとに描き出している。1967年当時、東京都には光明養護学校のほかに3校の肢体不自由養護学校があったが、入学が許可されない子どもがいた。茨城県にも肢体不自由養護学校が1校あったが、日立市にはなんら届いていない。

「人は差別されることなく、人間として尊重され、幸せに生活する権利をもっています」という『愛と力』の結びとなる普遍性をもったこの言葉は、1960年代の障害児教育権保障を象徴している。そして学校教育を保障するというとき、それはどのような内容を備えるべきなのか、一部ではあるが光明養護学校の映像がそれに答えているといえるだろう。

本稿は、平成26年度放送文化基金助成による戦後障害児教育福祉実践記録史研究会（代表玉村公二彦）「福祉社会形成期における肢体不自由教育映像の研究」の成果の一部である。

本稿の執筆にあたり、松本昌介氏からは光明養護学校関係資料の提供や助言をいただき、船橋秀彦氏からは映像の提供をいただいた。渡辺生氏の聴き取りが実現したのは船橋氏の力による。また『愛と力』のシナリオ起こしは奈良教育大学特別支援教育特別専攻科生の協力によるものである。記して、感謝の意を表するものである。

## 注

- 1) 玉村公二彦・服部敬子（2013）戦後京都府における障害児教育の進展と学校づくり—京都府広報映画『人』（1968年）を中心に—。福祉社会研究、第14号。戦後障害児教育福祉実践記録史研究会（2015）戦後京都府における障害児教育の進展と肢体不自由教育・知的障害児教育、pp.2-15所収
- 2) 『戦後京都府における障害児教育の進展と肢体不自由教育・知的障害児教育』には、玉村公二彦・山崎由可里「京都府立与謝の海養護学校の開校と『障害児のとりで』—すべての子どもにひとしく教育を保障する学校づくりと障害児教育の創造—」、玉村公二彦「人間発達の連鎖と教育の鼓動

- すべての子どもにひとしく教育を—」の3論文とともに、関連する証言と資料が収められている。
- 3) これらに先行する劇映画として、肢体不自由児施設「しいのみ学園」園長山本（昇地）三郎による記録『しいのみ学園』を原作とする同名の劇映画が1955年に制作、劇場上映されている。
  - 4) 東京都立光明養護学校のフィルムに関しては、中村尚子（2015）戦前から1950年代の映像にみる肢体不自由教育—東京都立光明養護学校の記録から—、立正大学社会福祉研究所年報、第17号、pp.39-54にその概要を示している。
  - 5) 空襲が激しくなった東京では、1944年から国民学校4年生以上の学童疎開が始まるが、光明国民学校はこの政策から取り残された。1945年3月10日の東京大空襲のあと、自力で疎開先を求め、同年5月、長野県更級郡上山田温泉での集団生活を送ることとなった。終戦後、学童疎開が解消された後も戦災孤児等集団合宿教育所として現地に残り、1949年5月まで集団生活を送る。その間の記録は、『信濃路はるか—光明養護学校の学童疎開』（光明学校の学童疎開を記録する会 代表 松本昌介、1993年）に詳しい。
  - 6) 東京都立光明小中学校（1952）創立二十周年記念誌。p.19
  - 7) 同上書
  - 8) 武市正子他（1955）愛の三輪車 小児マヒの母親と教師と医師の記録。河出書房
  - 9) 竹井美千代（1975）小平養護学校が生まれるまで、東京都立小平養護学校創立20周年記念誌「道」、p.11
  - 10) 全国肢体不自由養護学校長会編（1981）肢体不自由教育の発展 改訂増補版。p.34
  - 11) 同上書、p.35
  - 12) 「昭和28年（1953）度に兵庫県が、病弱児対象の県立上野ヶ原養護学校を、同30年度に群馬県が、病弱児対象の県立養護学校をそれぞれ設置した。これに続いて、同31年度には、大阪府が、府立盲学校肢体不自由特殊学級を母体に府立養護学校を、また愛知県が、肢体不自由児施設（青い鳥学園）に併置して県立養護学校をそれぞれ創設した。」同上書、p.37
  - 13) 松本保平（1962）公立養護学校整備特別措置法案をめぐって。光明三十年、pp.47-52。  
なお同論文は、『肢体不自由児とともに松本保平先生遺稿集』（同書刊行委員会編、代表者 松本昌介、田研出版、1990年）にも収録されている（pp.177-188）。
  - 14) 全国肢体不自由養護学校長会編『肢体不自由教育の発展』は肢体不自由養護学校全県設置を記念して、1969（昭和44）年10月に出版されたものである。発行は日本肢体不自由児協会。
  - 15) 東京都教育委員会（1977）心身障害児全員就学—東京都における経過と課題—。p.18
  - 16) 渡辺生は、1917年、新潟県に生まれている。映画にあこがれて19歳で上京。東京発声映画製作所という映画制作会社で照明技師として勤務した。戦時下で応召を経験したが、戦後、フリーの照明技師として映画制作に参加し、傍らで記録映画を自主制作する。その最初の作品となったのが『愛と力』である。ほかに秩父困民党を描いた『山襲の叫び』（1981年）、『時は甦る』（1983年）などがある（[http://www.motherbird.net/~kaze/\\_info/syousan.html](http://www.motherbird.net/~kaze/_info/syousan.html)）。
  - 17) 渡辺生氏からの聴き取り。2015年1月17日。この日の聴き取りは、船橋秀彦（茨城県立水戸飯富特別支援学校教諭）と『愛と力』撮影当時の光明養護学校教諭である松本昌介とともに実施した。船橋は地元で障害者問題の研究に取り組んでいるが、映画上映企画を主催した際に渡辺と出会い『愛と力』の存在を知った。筆者らは船橋を通じてこの映画のDVDを見ることができた。
  - 18) 渡辺氏所蔵の感謝状。
  - 19) 『東京市立光明学校概要』（1932年、第二号から「紀要」となる）中、欧米の施設や学校について述べた論文「欧米における不具児童教養施設の概要」（無署名）には、アメリカ、イギリスの肢体不自由児施設（学校）のスクールバスについて紹介している。また、松本昌介は当時を振り返って、スクールバスのようすを「スクールバス秘話」として紹介している。「赤羽、品川、浅草を起点にして子どもを拾いながら学校まで七〇分かけて運行する。先生たちも順番に乗り込む。観光バスで、車いすを載せるという余裕はない。（以下略）」（松本昌介（2014）実践記録集 肢体不自由教育覚え書き。pp.314-317）
  - 20) 松本昌介（1998）父母と教師が燃えたとき—肢体不自由養護学校介助員の記録—。田研出版、p.21
  - 21) 「昭和33年、都立光明養護学校に専門職員を配置し、時間割中に「機能訓練」を位置づけました。専門職員といっても理学療法士（PT）、作業療法士（OT）の制度ができる前であったため、三療（マッサージ・鍼・灸）か看護婦の資格をもっている人が適任とされました。そして昭和38年、現在の機能訓練師制度が確立しました。」（都障教組機能訓練師部（1983）子どもたちにゆきとどいた機能訓練を。東京都障害児学校教職員組合、p.3）
  - 22) 当時の言語訓練については、松本昌介による報告がある。「脳性マヒ児の書写及び言語訓練」（1959年12月、東京都特殊教育研究協議会発表）、「脳性マヒの目と耳の異常について」（1960年、第5回肢体不自由児教育研究発表会）、「言語指導の概況」（1961年、光明養護学校）。松本昌介（2014）実践記録集 肢体不自由教育覚え書きpp.328-341に収録されている。
  - 23) 『光明三十年』p.89（「高等部の職業教育」）
  - 24) 『父母と教師が燃えたとき—肢体不自由養護学校介助員の記録』（前掲18）は、この要求の根拠となった付き添いの実態調査、親の声など当時の記録に基づいて論じられており貴重な文献である。
  - 25) 1965年5月から翌66年4月まで、週1回、朝日新聞家庭面に連載された「おんもに出たい」はその代表だろう。単行本のあとがきは次のように記されている。「レジャーブーム、泰平ムードなどといわれる昨今、その恩恵にも浴さず暗い谷間に取残されている脳性マヒを中心とする重症心身障害児の問題に脚光を浴びせ、同時代に生きる多くの健康な人々にこの問題を報告し、同時に行政機関にその対策の推進を求めるとというのが連載のねらいだった。」朝日新聞学芸家庭部編（1967）おんもに出たい、雪華社。
  - 26) 日本教育学会は、学会の課題研究として「障害児の教育を受ける権利」を設定し、1969年にはその成果に基づき『教育学研究』において特集を組んでいる。ここでの研究は当時の不就学をなくす運動を理論的に後押しした。
  - 27) 文部省（1958）肢体不自由児教育の手びき（上）。p.6
  - 28) 文部省（1967）肢体不自由児教育の手びき（上）4版。pp.7-9



## 資料1 「愛と力」の映像とナレーション等の内容（●は不明文字）

映 像	ナレーション
<p>ムービー日立 文部省選定 協力 日立市</p> <p>この映画は恵まれない肢体不自由児と精神薄弱児に焦点をあてて描いたものです。</p> <p>終始協力下さいました次の諸団体に心から感謝する次第です。</p> <p>製作者一同</p> <p>推薦 全国特殊教育推進連盟／全国特殊学校長会 全国特殊級設置学校長協会／全国肢体不自由養護学校PTA連合会／日本肢体不自由児協会 東京都立光明養護学校PTA／全日本精神薄弱者育成会／全国盲学校PTA連合会／全国聾学校PTA連合会 日立市 協力 肢体不自由児社団法人こだま会 社会福祉法人全国重症児（者）を守る会 全国青少年育成協会 末広商会一同 上倉文彦 小林秀雄 森谷秀雄 若林 博 塩田繁太郎 高橋金一郎 古川正己 阿部弘八</p> <p>今は亡き、友の言葉も吾と同じ。 母より先に 逝くが幸せ ねんねんに 背たけののびて うれしさに うれしいの深む 薄幸の子よ</p>	
<p>入学式</p> <p>母と子どもが入ってくる。母親に支えられながら歩行する子、抱えられている子。母親の膝に座る子教員との対面 子どもたち（在校生）が大勢椅子に座っている。小野校長が新入生にノートを手渡す。</p> <p>習字を書く少女 その文字が「愛と力」</p>	<p>バックに流れる校歌</p>
<p>企画 東京都立光明養護学校後援会 制作 足立喜八郎 渡辺 生 監修 光明養護学校長 全国養護学校長会会長 小野勲 光明養護学校教頭 佐藤彪也 構成 渡辺 生 撮影 高岩 震 照明 ワタナベグループ 録音 東音スタジオ 音楽 光明音楽部</p>	

<p>編集 中島照雄 現像 横浜シネマ 解説 石井鐘三郎</p>	<p>生徒のバンド演奏が流れている</p>
<p>母子、バスを待っている。 バス内の松葉杖置き場アップ。 学校に到着し、子どもたち、降車。廊下を移動。</p>	<p>N君、11歳。N君は、小学校1年の時、交通事故に遭い、それが元で左足が不自由になりました。そこで心配した両親は、いろいろ考えた末、のりたか君を東京世田谷の都立光明養護学校へ入れることにしたのです。洗足駅で降りると、学校のバスが迎えに来ています。このバスは、東京都が手足の不自由な子どもたちのためにつくったもので、その名も「ひかり号」。バスは、途中で何回か停まっていきます。もう運転手さんともすっかり仲良しになりました。</p>
<p>戦前の映像 電車の走っている風景。戦前の麻布校舎全景。 「東京市立光明学校」の門。 三輪車で遊ぶ子ども。 路面電車の乗降風景（街頭の通学風景）。</p>	<p>ここが東京都世田谷区松原にある都立光明養護学校です。現在、この学校には手足の不自由な子どもが、小学部、中学部、高等部、合わせて360人、それに教職員が106人います。</p>
<p>看護婦が子どもの上腕をマッサージ。遊んでいる風景。 子どもたちの疎開生活のようす。畳の広間にみんなで寝ている。</p>	<p>この都立光明養護学校は、昭和7年、都内の手足の不自由な子どものうち、普通の学校で教育することが難しい子どもたちに、教育と治療をするために設立されました。</p>
<p>終戦後に新しくなった世田谷校舎の全景  「東京都立江戸川養護学校」 校舎玄関全景。 白い体操着の比較的年長児が体操をしている。桜のクローズアップ。</p>	<p>我が国で最初につくられた昭和7年当時の光明学校です。</p>
<p>ふたたび光明養護学校の校舎内 職員室。職員同士のミーティング。</p>	<p>空襲が激しくなってきた昭和20年、学校は長野県上山田温泉に疎開しました。</p>
<p>「松森学級」での学習風景。 「社会」の掲示物。授業板書。 「社会」の授業。机や椅子はふつうのもの。鉛筆でノートに字を書く子どもたち</p>	<p>そして、昭和20年5月、戦災に遭った光明養護学校は、終戦後、昭和24年の5月、ようやく新しい校舎に移ることになったのです。昭和7年の創立から35年間、様々な困難を乗り越えて、恵まれない子どもたちの教育と治療、訓練に励んでこられた教職員の皆さんのたゆまぬ努力によって、次第に学校も整備されてきました。</p>
<p>一般校の「音楽」の授業風景。 カステネットやタンバリン、手拍子、身体を動かす。</p>	<p>職員室では、今日も授業を前にして、教頭先生を中心に、今日の授業について先生方の話し合いが熱心に行われております。</p>
<p>光明養護学校の「音楽」の授業風景。「霞か雲か」のピアノに合わせてハーモニカを吹いている。歌唱。 机の下、下肢装具をつけた子どもの脚に焦点</p>	<p>教室では、普通の学校と同じように、今、社会科の勉強が続いています。将来、立派な社会人になるために勉強する子どもたちの表情にも真剣さがあふれています。</p>
	<p>普通の学校の音楽教室。この子どもたちは、音楽に合わせて、自由にリズムを取ることができます。しかし、手足の不自由な子どもたちは、それが難しいので、学校では様々な楽器を使って豊かな情操を身につけさせるよう努力しています。</p>

「図工」風景。水彩による描画。	また、不自由な手でする図工も大変です。
<p>給食調理風景。</p> <p>子どもたちが自力で給食の食缶や牛乳などを運搬し配膳。</p> <p>食事風景。</p> <p>パンにマーガリンを塗る先生など食事介助の場面あり。ふたをしたままの牛乳瓶にストローをさしている。自分で食べようとする子、麻痺のある手でパンをちぎり、スープをつけて食べる子など</p>	<p>ここは、子どもたちの昼食を作る調理室です。なにせ先生を含めて466人分の食事を作るのですから、給食のおばさんも大変です。しかし、少しでも栄養があって美味しい食事を作ろうと、献立や味付けに気を遣い、調理の腕をふるっています。美味しい香りが爽やかな風に乗って校庭にまで流れています。この学校では、子どもに独立心を持たせ、同時に手足の機能を高めるために、できるだけ子どもに給食の手伝いをさせています。これが本当の愛情だと校長先生は言っています。この子もやがて一人で食べられる日が来ることでしょう。</p> <p>※教師のインタビュー音声（女性）あり（聴取困難）</p>
<p>「機能訓練室」の表示。身体機能訓練。白衣を着て立っている女性と同じく白衣を着て子どもの訓練を実施している女性。</p> <p>上肢、下肢、体幹の機能訓練や平行棒を使った歩行訓練。</p>	<p>障害を克服して、手足を自由に動かせるようになるため、子どもたちが訓練をしています。この訓練は、長い間、根気よく続けなければ効果が現れないので、専門の先生方のご苦労も並大抵ではありません。</p>
<p>「言語治療室」で検査（聴力、口腔）。</p> <p>口腔内の写真を撮影する場面</p>	<p>また学校では、定期的に外部から専門医を呼んで、子どもたちの保健に努めています。今日は、耳の障害程度を調べ、治療にあたっています。さらに、言葉の不自由な子どもには、その原因を突き止めるため、いろいろな角度から写真を撮り、詳しく記録していくこともあります。</p>
<p>保護者控室でつきそいの母親たちが談笑。編み物をしている親もいる。</p>	<p>子どもの授業が終わるまで、お母さんたちは、控え室で待っています。話題は、やはり子どものことが多いようです。（母親の話あり、聴取不能）</p>
<p>（下校風景）</p> <p>校内の屋外の歩道。空の車椅子を押す母親。アテトーゼの男児は松葉杖歩行。</p> <p>校外へ出る。転んで膝をつくが、自力で立ち上がる。途中から男児は車椅子に乗る。踏切を渡る。</p> <p>帰宅。和む母子。</p>	<p>授業が終わって、学校から帰るY君とお母さん。Y君は、この学校へ入るまでは一人で歩けませんでした。学校で訓練したお陰で、今ではこんなにも元気に歩けるようになりました。転んでも一人で自分の力でY君は立ち上がれるようになりました。同情より理解をというのがお母さんの気持ちなのです。今日も無事に終わり、我が家に帰って、ほっとするY君のお母さん。しかし、Y君のように養護学校へ入れる子どもはまだ恵まれていると言えましょう。社会には、養護学校に入りたくても入れない子どももいるのです。</p>
<p>（おそらく就学できなかった子どもが）プラレールで遊んでいる。</p>	<p>東京板橋区のこの少年は、今年の春、ある養護学校に入学試験を受けに行ったのですが、施設が少ないことと、教職員の数が足りないため、入学を断られてしまいました。この少年が整った設備の中で、行き届いた教育と治療が受けられるのはいつの日のことなのでしょう。</p>
<p>日立市の全景。工場のサイレンの音。山間の木造住宅から工場地帯へと視線を移し対比</p> <p>山間の住宅地の中を訪問宅へ向かう車。</p>	<p>茨城県日立市、人口18万。鉦工業都市として知られる日立は、また心身障害児の福祉活動の盛んなことで、全国でも指折りの都市の一つです。日立市には、全国重症心身障害児者を守る会の日立支部があり、活発な活動が続けられています。社会の温かい理解と協力で、こうした子どもの上にも少しずつ光が射し始めましたが、光が届かない社会の奥底には、まだ多くの恵ま</p>
<p>トタン屋根、とびらの壊れた小屋同然の住居</p> <p>調査員を乗せた自動車が未舗装の道を上っていく。</p>	



訪問宅での面談風景。

こたつに入った丸刈りの男性。顔をタオルで拭いてもらっている。話をする母親、調査員（男性）、記録をする女性（2名）

T君（小学生高学年か？）、庭で洗濯ものを干したり畑仕事をしたりしているのは母親らしい女性。傍らで、ふらふらと歩いたり少年雑誌を見たりしている。

家の中の様子。鍋ややかんが床に置かれた狭い台所  
食卓にご飯と汁、一品のおかず。

調査員が、母子手帳を見ながらメモをとっている。

「○氏名○ 昭和33年12月●日」

その下に、○○ 昭和35年5月●日、○○ 昭和39年4月●日、  
○○ 昭和39年11月●日、○○ 昭和41年9月●日とある

（おそらく末子であろう0歳児を膝に抱えた女性アップ）壁にランドセルと帽子が掛けてある。調査員（男性）に答える母親。壁に立てかけてある下肢から体幹にかけての装具アップ。女兒のアップ。ふたたび母子手帳4冊。

子どもたちは「小学●年生」などの月刊雑誌を広げている。

ふたたび家の外

漁村の全景。空き地で遊ぶ子どもたち。

Mちゃんの家。ゆかた姿で床に寝転び、上半身を起こして独りでテレビを観ている。拘縮した足のアップ

港に着いた船を陸揚げする母親。

調査員4名が歩いている。

橋梁下の河原にある、小屋のような家での調査風景。

少女が河原で走り回っている。

「一人もれなく愛の手を 日立支部」

会議風景。

机上に『この子らを世の光に』の本。

全国重症心身障害児（者）を守る全国大会の様子。

講演風景。

関係団体の一覧の垂れ幕。

れない子どもが取り残されたままになっています。この子どもたち全てに明るい道を拓くため、社会福祉協議会と日立支部の人たちは、今日も重症児の家庭訪問に出かけるのです。

Kさんは、今年31歳。寝たきりの重症心身障害者の一人です。お父さんは、鉾山に30年勤めて退職しましたが、子どものために退職金も使い果たしてしまい、今は日雇いに出て一家を支えています。60歳を越したお母さんは言うのです。「この子を残しては死んでも死にきれません」と。

隣のTさんも、耳が聞こえず、足が不自由な気の毒な子どもです。お父さんは、出稼ぎに行ったまま、もう半年以上も帰ってきません。一家の大黒柱を無くして、お母さんは菌を食いしばって生きています。

壊れたままで映らないテレビ。直すお金もありません。しかし、それでも子どもはテレビがあるというだけで満足しなければなりません。

16歳のこのMちゃんもまた、手足が不自由なため、自由に歩くことができません。それでもまこちゃんの頭の良いのが一家の人たちの大きな慰めになっています。両親が漁に出た後は、たった一人でテレビを観て楽しんでいます。

精神に異常をきたした可哀想な少女。やや凶暴性があるので、お母さんは片時も目が離せません。

重症児を救う第一歩は、世の中の偏見を恐れなくて、明るい太陽の下で遊ばせることでしょう。医者であり重症児の親でもある渡辺さんは、このように語っていました。

守る会の事務所で、今夜も遅くまで話し合うお父さんや役員さん。18万の町に小学校へも施設にも入れない子どもが50人以上もいるのです。社会に復帰することが無理なために、福祉法の法律からも洩れてしまった重症児は、全国に5万人も居ると言われます。

さて、全国重症心身障害児者を守るための、第3回全国大会が42年5月3日、東京虎ノ門のニッショーホールで行われました。この大会で、障害児を持つ茨城県日立市のKさんは、涙ながらに次のように訴えました。

Kさん）全国の多くのお母さんを代表して、この動く重症児にも国の温かい福祉の灯が点りますよう、何も言えないMに代

<p>日立市児童館の全景。 大人たちが、「数珠玉づくり」作業の仕込み。</p> <p>子どもたちの「数珠玉づくり」作業風景。 手に麻痺がある子ども（学齢児3人）がヒモ通しをしている。</p> <p>レコードに合わせて、みんなで体操、ダンスしている様子。年長か小低くらいの子どもたちリトミック</p> <p>通常学校のマット運動、跳び箱、球技、体育の授業風景。 養護学校の体育の授業風景。体育館、校庭。 体力測定 寝返りで移動する子ども。前屈を補助する教員</p> <p>（大運動会）ふたたび光明養護学校 小野校長先生の話。多くの保護者が参観している。 徒競争。歩行可能な脳性麻痺のグループ、上肢が不自由なグループなど障害の似通ったグループで走っている。松葉杖の子どもが車椅子の子どもを押している。 フォークダンス、くす玉割り等、競技の様子。</p> <p>遠足。バスの車中。 横浜マリンタワー展望を楽しむ様子。 周囲の公園の散策。 弁当風景。</p> <p>「職業科教室」 タイプライター、カナタイプを行う子どもたち。 活版印刷の活字を拾う、ガリ版制作する生徒。</p> <p>バンド活動 エレキギターのアップについて、トライアングル、マラカス ドラム、鈴輪、鉄琴各々が楽器を演奏する様子。</p> <p>卒業生入場。 証書授与。車椅子の生徒たちが最前列。 小野校長が壇上から一人ひとりに子どもたちに手渡される。子どもたちは制服やブレザーを着ている。 答辞は脳性麻痺の車椅子に乗った女兒 「蛍の光」斉唱。</p>	<p>わりお願いいたします。重症児を抱えた親の気持ちが一番辛い季節は、桜の咲く・・・</p> <p>ところで、日立には、これまでこうした子どもたちに教育や治療をする施設や学校がありませんでした。そこで、お母さんたちが、これではいけない。みんなで力を合わせなければと、日立市に強く働きかけた結果、市の社会福祉協議会は、取り敢えず、市の児童館に通園施設のひまわり学級を開くことになりました。このひまわり学級の運営は、重症児のために少しでもお手伝いをしたいと申し出た善意のお母さんのグループに任されています。ひまわり学級では、子どもたちの指の機能を高めるために使う数珠玉を作っています。みんな子どものための数珠玉作りに一生懸命です。</p> <p>♪お日様と一緒に 早起き一緒に 新聞取ったり抱えてさ 駆け足配達さっさっさ。毎日ありがとう ご苦労さん</p> <p>元気いっぱい飛んだり走ったりする健康な子どもたち。一方、体に障害がある子どもたち。体力ではかきませんが、気持ちの上では、けっして健康な子どもには負けてはいないのです。</p> <p>今日は、待ちに待った運動会。様々な障害にもめげず、子どもたちは日頃鍛えた力を精一杯發揮して、澄み切った青空の下、明るい一日を過ごしました。</p> <p>楽しい楽しい遠足の日がやってきました。みんな揃って横浜へ。マリンタワーから景色を眺めて大喜び。普段はなかなかこうした所に来られないだけに、みんなのはしゃぎ様は大変なものでした。</p> <p>ところで、光明養護学校では、生徒が学校を卒業して社会で活躍する日のために、高等部の生徒たちには、タイプや活版印刷、それに機械編みやガリ版などを教えています。</p> <p>また、この学校には音楽の好きな生徒と卒業生で作っているバンドがあり、週一回集まっては練習をしています、その腕前はなかなか大したものですよ。</p> <p>いよいよ卒業式を迎えました。3月23日、小学部、中学部、合同の卒業式です。校長先生から生徒の一人ひとりにはなむけの言葉と共に卒業証書が手渡されました。そして、校長先生から、本日皆さんが無事卒業できるのは、お父さんやお母さん、諸先生、それに社会の皆さんのおかげです。これからは、進学する人も、社会に出る人も、体の障害にも負けないで大いに頑張っ</p>
--	---

<p>千葉の海を背景として建物（訓練センター）</p> <p>「人の子もわが子も同じ愛の手で 橋本龍太郎」の書</p>	<p>てくださいと励ましの言葉がありました。</p>
<p>昭和42年度こだま会総会風景 ほとんどが母親。</p>	<p>ここは、千葉県安房郡鴨川町です。ここに42年4月、手足の不自由な子どもを持つお母さん方の会、「こだま会」の手で、肢体不自由児の訓練センターが完成し、今後の活用が期待されています。こだま会では、今日も今後の活動について熱のこもった話し合いが続いています。</p>
<p>卒業生の就職先 （日本医科大学の文字） 働く様子 タイプによる伝票作成、ガリ版印刷、事務業務）。 （日東精密時計）時計、部品組み立て。 ガリ版筆耕アップ 靴修理（ポリオの男性）</p>	<p>ところで、養護学校は卒業した人たちは、病院に靴屋に、あるいはガリ版切りに各職場で立派に働いています。</p>
<p>披露宴風景。</p>	<p>卒業生の中には、先生方の努力で、体の不自由な人同士で、めでたく結婚にゴールインした人もいます。人は、誰でも差別されることなく、人間として尊重され、幸せに生活する権利を持っています。全国330万と言われる心身障害児者に対して今、最も望まれるのは、私たちの温かい愛情と理解でありましょう。</p>
<p>東京駅遠景。</p>	
<p>「おわり」</p>	